

## ハンガリー動乱50年：ナジ・グループ亡命の謎を解く

盛田 常夫

### ハンガリー軍事制圧の決断

ハンガリー動乱をめぐる、いまだ完全に解明されていないことがある。ハンガリーを軍事的に制圧し、ナジ政府に代えて、カーダールを首班に据えた臨時政府を樹立するシナリオはどこでどう立案されたのだろうか。その実行過程で何が計画通りに実現し、何が実現しなかったのだろうか。ナジ・グループは自ら進んでユーゴスラビア大使館に亡命を求めたのか、それともこの亡命劇は最初からソ連によって仕組まれたものだったのか。ユーゴスラビアはこの計画実行にどれほど関わっていたのだろうか。関わっていたとすれば、ユーゴスラビアの政治的な意図は何だったのだろうか。

ハンガリーの軍事制圧と臨時（傀儡）政府樹立の基本的なシナリオを描いたのはもちろんソ連共産党政治局である。まさに、ハンガリーが平静を取り戻そうとしていた矢先に、フルシチョフはハンガリーの軍事制圧を決断した。10月31日である。その日からフルシチョフは周辺社会主義諸国の了解を得る隠密行脚にでかけた。

このフルシチョフの決断を促したものは、戦後冷戦体制の境界変更の拒否である。もしここでハンガリーに譲歩すれば、ハンガリーが戦後社会主義体制から離脱し、ソ連の衛星国に空白地帯が生まれる。西側陣営にとってハンガリー1国のウェイトは小さいが、東側陣営にとっては致命的な損失を意味する。西側と東側ではハンガリー問題の重要性は天と地ほどの違いがあった。この世界情勢認識が西側政府の無関心とソ連のハンガリー武力制圧を決断させた。

### 国際協力の取得

フルシチョフの行動は速かった。11月1日にポーランド共産党第一書記グムルカと国境町ブレストで会談し、軍事制圧の了解を求めた。グムルカは賛成しなかったが、ソ連の決定を尊重する

姿勢を示した。この後、フルシチョフ一行はルーマニアに向かい、ルーマニア首脳とブカレストに滞在していたチェコスロバキアのノヴァトニ第一書記から了解を取り付け、続いてブルガリアに飛んだ。

ここまでは特段の問題なしに進んだ。当時のソ連にとって気遣いが必要だったのは、社会主義建設で独自路線を歩む中国とユーゴスラビアである。ともに、ソ連の力を借りずに、パルチザン闘争で社会主義権力を築いた国であり、ソ連と同等の権利を主張する国である。

当時、毛沢東はハンガリー情勢の情報収集のためにモスクワに特使を派遣し、ハンガリーの成り行きを見守っていた。中国はソ連が武力を行使して東欧諸国を制圧することに批判的だったが、ハンガリーが社会主義陣営を離脱することは容認できないという一点でソ連と一致していた。フルシチョフは11月1日、中国に戻る特使を空港まで送り、車中でソ連の決断を説明し、毛沢東への義理を果たしていた。そして、最後に難敵ユーゴスラビアの説得にでかけた。

フルシチョフは飛行機と小船を乗り継いで、アドリア海に浮かぶ小島ブリオニに到着した。11月2日午後7時である。ブリオニにはティトの別荘があり、フルシチョフとマレンコフは、ティト、カルデリ、ランコヴィッツに迎えられた。当時のモスクワ駐在のユーゴスラビア大使ミツノヴィツも同席し、この極秘会談は翌朝5時まで続いた。

フルシチョフはそこからモスクワに戻り、3日午後からカーダールの説得に入った。既述したように、クレムリンには臨時政府首班候補としてソ連共産党が選定したミュニツヒとカーダールがハンガリーから連行されていた。軍事制圧作戦の実行はすでに4日未明と決められており、残された問題はソ連軍の進軍に合わせて臨時政府の首班を決めることだけだった。

もしカーダールが引き受けなかったらどうなっていたらだろうか。おそらく、ナジ・グループと同じ運命を辿っただろう。生き延びようとするれば、カーダールに選択肢は存在しなかった。

ブリオニで何が話し合われたのか。この極秘会談の内容は書面で残されていないが、会談に同席したユーゴスラビア大使のインタビュー記録が存在している。また、ナジ・グループの亡命受け入れからカーダール政府との交渉過程を語ったブダペスト駐在ユーゴスラビア大使のインタビュー記録も存在する。この極秘会談および大使館現場とユーゴ政府との交信記録を読み解けば、ソ連とユーゴスラビアとの合意内容と情勢の変化による合意破棄が明らかになってくる。

これを解明する前に、ユーゴスラビアとソ連、ハンガリーをめぐる当時の事情を知っておく必要がある。

### ユーゴスラビアをめぐる確執

スターリンのソ連とティトのユーゴスラビアの断交は1948年に始まる。スターリンは自らの権力を固めるために、共産党内や社会主義国からアメリカ帝国主義の手先を摘発するキャンペーンを始めた。国家としてやり玉に挙がったのは、スターリンのソ連に反旗を翻したユーゴスラビアである。それまで良好な関係にあったハンガリーでも、ラーコシがスターリンの威を借りて、アメリカのスパイ摘発と称してライク外相を逮捕・処刑し、返す刀で「ユーゴスラビア修正主義」を口汚く罵ることになり、ハンガリーとユーゴスラビアの二国間関係は最悪の状態に落ち込んだ。

1953年のスターリンの死去に伴い、フルシチョフはユーゴスラビアとの和解に努め始めた。1955年にフルシチョフのベオグラード訪問が、1956年6月にはティトのモスクワ訪問が実現した。しかし、ラーコシが居座るハンガリーとの関係は、依然として冷え切ったままだった。

モスクワを訪問したティトは、ユーゴスラビア社会主義の自主・独立権の承認、二国間の

経済協力関係の推進のほかに、もう一つの要求をフルシチョフに突きつけた。それはハンガリーのラーコシ退陣である。ラーコシにたいするティトの怒りは激しく、ラーコシはスターリン亡き後の中欧に君臨する最後のスターリニストだと考えていたようだ。こういう経緯から、ラーコシに虐げられていたナジ・イムレに好意を抱いており、ラーコシに代わってナジが実権を握ることを期待していた。

この6月のモスクワ会談の中で、フルシチョフはハンガリーへの軍事介入の可能性を示唆してユーゴスラビアを牽制しつつ、ハンガリー情勢の流動化に何らかの対処の必要性を認めたようだ。しかし、ラーコシを失脚させることは、反社会主義陣営を勢いづかせるという理由で、ソ連共産党はラーコシ退陣要求を受け入れなかった。その後、情勢がさらに流動化したために、7月に入ってソ連共産党はラーコシを見限り、同じくラーコシ一派のゲルーを共産党のトップの据えることで、事態の收拾を図ろうとした。

もしこの時点でナジに権力委譲が行われていたとしたら、状況は変わっていただろう。しかし、ソ連共産党はナジを修正主義者と評価しており、ソ連が切り出すカードに入っていなかった。ソ連共産党は、同じ修正主義に犯されたユーゴスラビアとナジのハンガリーが結託する危険も回避したかった。

### ソ連とユーゴスラビアの駆引き

ユーゴスラビアは、10月24日のソ連の第一次軍事介入を厳しく批判した。6月のモスクワ会談で軍事介入の可能性を示唆したフルシチョフであるが、最終的な軍事制圧の了解を得るために、今一度、ティトと腹を割って話し合う必要があった。パルチザン闘争を経験してきたユーゴ軍がハンガリー情勢に介入することになれば、それこそ第三次世界大戦を引き起こしかねない。事実、ハンガリーとの国境地帯は戒厳状態にあった。ハンガリーに肩入れすることはないだろうが、念には念を押して、ユーゴスラビアの了解を得る必要があった。

他方、ハンガリー情勢が混沌化する中で、ユーゴスラビア首脳的情勢判断が変化した。ナジ政府が10月30日に打ち出した複数政党制の容認とコシュート紋章使用許可にたいして、ティトーは明確な拒否姿勢を示した。複数政党制はユーゴスラビア体制の否定をも意味し、コシュート紋章は大ハンガリーの野望とも結びついているからである。

事ここに至って、ティトーは情勢を安定化させる能力に欠け、譲歩に譲歩を重ねるナジを見限ったのである。この点でフルシチョフの情勢判断と一致した。ブリオニの極秘会談ではこうした認識の交換とナジに代わる臨時政府樹立について意見が交換された。ソ連側はナジに代えてミュニッヒを首班とする臨時政府構想を提示したのにたいし、ティトーはカーダールを首班とする労農臨時政府の樹立を主張した。ソ連滞在が長いミュニッヒはソ連にとって都合が良いだろうが、それではラーコシやゲルーと同じ道を辿る。ティトーはほんの数週間前にベオグラードを訪問し、ナジ政府にいるカーダールを推したのである。

フルシチョフはティトーの提案に耳を傾けることで、ユーゴスラビアの顔を立てた。これでソ連側のユーゴスラビア問題は落ち着いたが、ナジの処遇をめぐるさらに協議が続いたはずだ。首脳同士の話し合いだから、細かな手続きまで合意されたとは考えづらい。ユーゴスラビアがナジ（ナジ・グループ）の亡命を引き受けるとう原則的な合意が交わされたと考えるのが自然である。後にブリオニ会談の事実が暴露され、これが「ソ連とユーゴの結託」の証左として取り上げられることになるが、この結託は一時的なものにすぎないことに注意すべきだろう。

## 同床異夢のソ連とユーゴスラビア

ソ連側から見れば、軍事介入への了解を得ただけで、この極秘会談は成功だった。ナジ処遇は二の次である。他方、ユーゴスラビア側から見れば、カーダール政府の樹立とナジのユーゴスラビア亡命は同等の重要性をもつ。ナジ政府

を構成している政治家がユーゴスラビア社会主義に親近感を寄せている以上、これは蔑ろにできないことであった。しかし、短時間の会談で、それも首脳同士の協議で、ナジ亡命の具体的な手続きを決めることは不可能だった。とりあえず、ユーゴ大使館で亡命者として受け入れるところまで決めたが、その後の手続きの詰めはなかったと考えるべきだろう。しかし、そのことが後々まで後を引く。歴史的事件には、相互理解の齟齬が後に大きな政治問題になる事例に事欠かない。

ソ連は軍事制圧後の事態沈静化に自信をつけ、ナジの影響力を徹底的に削ぐために、ユーゴスラビアへのナジ亡命を拒否する姿勢に転じた。ブリオニ会談の合意破棄である。ユーゴではなく、ソ連の指示通りに動くルーマニアへ「亡命」という体裁をとったのである。

ソ連にしてみれば、ユーゴスラビアにはこちらから出向いて義理を立てたし、ティトーの提案も飲んだ。軍事介入が成功したから、後は自分たちのやりたいようにやらせてもらう。他方、ユーゴスラビアには、フルシチョフにしてやられたという思いだけが残った。もちろん、ユーゴスラビアには国の存亡を賭けて、ハンガリーに介入する余力などなかったが、一度は顔を立ててもらい、二度目は顔に泥を塗られた。

当時のブダペスト駐在ユーゴスラビア大使ソリダリッツァは、退官の後、家族にたいして繰り返して、「我々はナジを売り渡した」と語ったという。ソ連にしてやられたという思いだけが残ったのだろう。

## ナジ・グループ亡命の経緯

「ソ連とユーゴの結託」を検証するために、ナジ・グループのユーゴ大使館への亡命の経緯、さらに大使館を離れる経緯を知る必要がある。

ユーゴスラビア（大使館）への亡命は、誰が最初に提起したのだろうか。ナジ政府要人か、それともユーゴスラビア政府か。パウル・レンドヴァイの近著（1956 Forradalomról tabuk nélkül, Napvilág kiadó, 2006）によれば、ナジを含め政府要

人たちには亡命の意味も必要性もなかったが、ユーゴ大使からの緊急要請で、ソ連の軍事制圧が開始される直前の11月4日未明に、大使館から差し出された車で大使館に移ったことになっている。この説明はいわゆる「結託」説を支持するものである。レンドヴァイは、ナジ政府要人が家族の亡命について打診したことはあるが、要人亡命の打診はなかったと記述している。

他方、ユーゴスラビアの外交文書にもとづくフランコビッチ・ジョルジュの検証（セルビアで発行されている日刊紙Magyar Szóに2006年10月から11月にかけて連載された特集）によれば、ユーゴスラビアへの亡命はナジ政府要人から打診されたとなっている。ソリダリツァ大使はユーゴ政府の訓令を受けて、連日、ナジ政府要人との会談を続け、情勢分析報告を本国に送付している。この一連の会談の中で、ナジ政府要人から二つの要請が提起された。一つはユーゴスラビア軍との協力関係の樹立であり、いま一つはナジ政府要人のユーゴスラビア亡命である。この亡命問題については、ナジ政府が継続していた数日間に、何人かの要人が折に触れて提起していたようだが、政府要請として正式に提起されたのは11月2日である。

党幹部の1人であったサントー・ゾルターンは、11月2日にソリダリツァ大使を訪問し、「党や政府の要人が脅迫を受ける事態におけるユーゴ大使館による亡命受け入れ」の是非について公式回答の要請を行った。ブリオニ極秘会談が始まる直前のことである。ユーゴ政府の公式（受け入れ）回答が翌日、サントーに伝えられた。もしそうであれば、ティトーはナジ政府要人の亡命要請を前提に、フルシチョフとの交渉を始め、その交渉結果にもとづきハンガリー大使に亡命受け入れの訓令を送ったと考えられる。

フランコヴィッチによれば、「未確認情報」だが、ティトーはフルシチョフとの会談の中で、「もし東から攻撃しないなら、我々が南から攻撃する」と語ったようだ。その真意は明らかでない。フルシチョフの歡心を惹くためか、あるいはユーゴ軍の存在を誇示するためか。

## 大使館からの移送

ユーゴスラビア大使館への亡命とカーダール臨時政府の樹立で、ブリオニ会談の合意が実現した。しかし、亡命者のユーゴスラビアへの移送は簡単に実現しなかった。

武力制圧による安定化に成功したソ連は、カーダール臨時政府に国内を掌握させ、二度とこのような混乱を起こさせないようにしなければならない。しかし、ナジ・グループの存在は常に攪乱要因になる。国内での放免はありえないが、修正主義が蔓延るユーゴスラビアへの亡命を許せば、彼の地で再びナジ政府が正統性を主張する可能性がある。これを許せば、ソ連を中心とする社会主義陣営の求心力が弱まる。したがって、ナジ・グループのユーゴスラビア移送は阻止する。これが11月16日にカーダールに伝えられたソ連共産党の方針である。

カーダールはこのソ連の方針を受けながら、事態打開のために19日にブダペストを訪問したユーゴスラビア外務副大臣ヴィディツァとソリダリツァ大使と協議を続け、「ユーゴスラビア大使館に亡命したナジ・グループの人々は、過去の行為による処罰を受けることなく、平和的に自宅へ戻る」ことで合意した。ソリダリツァ大使とミュニッヒ内務大臣は11月21日深夜、合意実行として、「翌日夕刻18:30分」にナジ・グループが大使館を離れることを決めた。

移送用のバスが大使館に横付けされ、子供たちが勇んで乗り込んだ。当時の大使館一等書記館によれば、「ナジは運転手に声を掛けたが答えはなかった。そこでいったんバスから降りた。大使は留まって良い、バスに乗らない方が良いと忠告したが、ナジは悟ったように再びバスに乗り込んだ」という。バスを追跡した大使館の車は、途中でソ連の軍用車に行方を遮られた。

ソリダリツァ大使は翌朝、カーダールとの面会と電話を要求したが断られ、即座にカーダール宛の書簡を送ったが、何の返答もなかった。以後、再び、ソ連とユーゴスラビアのイデオロギー的対立が先鋭化することになった。

（関連記事は、<http://morita.tateyama.hu>を参照されたい）